

主イエスが十字架にかかるためエルサレムに入られてから二日後、神殿に上った主イエスは律法学者やファリサイ派、サドカイ派と呼ばれる人達と議論をなさいました。主イエスが十字架にかかるために捕えられる二日前の出来事でした。「議論の火曜日」と呼ばれている日の出来事です。

さて、さきほど読まれました福音書の前に、サドカイ派の人達と主イエスとの議論が記されておりましたので少し見てみましょう。

その同じ日、復活はないと言っているサドカイ派の人々が、イエスに近寄って来て尋ねた。「先生、モーセは言っています。『ある人が子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。さて、わたしたちのところに、七人の兄弟がいました。長男は妻を迎えましたが死に、跡継ぎがなかったので、その妻を弟に残しました。次男も三男も、ついに七人とも同じようになりました。最後にその女も死にました。すると復活の時、その女は七人のうちのだれの妻になるのでしょうか。皆その女を妻にしたのです。」イエスはお答えになった。「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、思い違いをしている。復活の時には、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。死者の復活については、神があなたたちに言われた言葉を読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。」群衆はこれを聞いて、イエスの教えに驚いた。

神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。という主イエスの御言葉は、主なる神は生きて私たちに働いておられる、今この時、私たち一人一人に働き掛けておられるのであるということを示されたのでした。死後のことのみ固執し、復活を否定しようとしているサドカイ派の人々は、その教えの深さ、的確さに返す言葉がありませんでした。

そして本日の福音書の部分が名実ともに主イエスがなされたこの世での最後の議論になったのでした。三年間の伝道生涯で、ファリサイ派を中心に主イエスは多くの議論なさいました。それは彼らの不完全さ、主なる神の前にいと小さき至らぬ存在でありながら私たちに愛してくださる主なる神の前に忠実な僕でありなさいということだったのですが、人間の自尊心か防護行為か、人々は悔い改めようとしませんでした。そしてついに最後の議論の時が訪れたのです。

本日の議論は、『律法の中で、どの掟が最も重要か』ということでした。主イエスは答えられます。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい』。この教えはファリサイ派の人達にとって珍しいものではありませんでした。それぞれ旧約聖書の申命記、レビ記に書かれている内容だからです。しかし重要なのは、この二つ

の教えが主イエスによって一つにされ、『律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている』と言われた点でした。ファリサイ派の人達にとって一番重要なのはモーセの十戒でしたが、主イエスはそれもまたこの二つの教えに含まれる、それどころかすべてがこの二つに集約されるのであると言われたのです。考えてみますと、主なる神の教えは難しい表現やたくさんの律法を経て伝えられていたものであったとしても、結局は主なる神が私たちが愛してくださる、私たちも主なる神を自分の存在全てをもって愛する、そして隣人を愛するということに他なりません。彼らの驚きはどうだったのでしょうか？

そして最後に主イエスは問われます。この間こそ、主イエスの存在に関わる重要なことでした。ユダヤの人々は、救い主すなわちメシアはダビデの子孫から現われると考えておりました。旧約聖書のイザヤ書にその約束が記されているからです。しかし救い主はそのような人間的な子孫の中から登場するのだろうか、一人の人間が主なる神の使命を負い、登場するのだろうか、主なる神は旧約聖書の時代、預言者を遣わして人々に悔い改めを勧めてきたが、人々は受け入れなかった、メシアこそそのような存在ではなく、主なる神が愛されているひとり子なのである、ということなのです。ダビデ自身もメシアを主と崇めているのではないか、と言われたのでした。

福音書の最後の部分はこうなっておりました。『これにはだれ一人、ひと言も言い返すことができず、その日からは、もはやあえて質問する者はなかった』。彼らは今日も主イエスから言葉尻を捕えることも出来ず、打ち負かされるだけでした。もはや彼らの反論は不可能だったのです。主イエスに対する人間の敗北です。しかし彼らは主イエスに対して何をしたのでしょうか。メシアと言われ、神の子と言われる主イエスをもはや受けとめるしかない、疑う余地もなくなってしまったのに、そうした素直な心に蓋をし、耳をふさいで真実の声を悪用したのでした。すなわち彼らは二日後に軍隊を率いて主イエスを捕えたのでした。そして六回にわたる裁判にかけ、神の子と主イエスが言われたのを神に対する暴言と言い、十字架につけたのでした。彼らがこの時もはやあえて質問する者はなかったという言葉の裏には、このような人間の持つ残酷さがひめられているのです。

このような心を持つ人間を主なる神は愛し、一人のみ子を遣わされるほど愛してくださいました。私たちもまた不完全さ、自分の非を素直に認められない者である以上、主イエスを十字架につけた一人であることを知らされます。とても悲しいことです。その私たちが主なる神が愛してくださる。これがどういうことか私たちもよく受けとめてみたいものであります。そして本日の教えにもう一度耳を傾けて、しめくくりとしたいと思います。

『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』